

## スリランカにおける少女虐待と施設からの社会復帰

光武 節

2015 年以來スリランカへの訪問を重ねること 10 回、この間に見聞きした少女への性的虐待の現状と社会復帰・自立支援のありかたについて考察してみる。

スリランカでは性的暴力を受けた少女は時として家庭から追い出され、路上生活者となる。ある NGO がその少女たちを説得して受け入れ、ベッドと食事を与え、義務教育年齢の子どもたちは学校に通わせている。

施設では社会復帰のために、裁縫、織物、刺繍、料理などの教育を行い、セラピストなどによる心理療育も行う。

ただ、一部がもとの家庭に戻ることはあっても、ここには長くても 1 年半ほどしか滞在できないため、多くは職を求めて社会へ出て行かなくてはならない。

聞き取りを行った対象となる施設は観光都市キャンディの郊外にあり、12 歳から 17 歳のおよそ 50 人の少女を収容している。

そのうち第 10 回目の今回、妊娠中または乳児を抱えている少女が 21 名であるとの報告を得た。

これまでの訪問では最も多く、初回の訪問以来、ほとんど状況が変わっていないとの印象を受けた。もちろん、このシェルターに居る少女たちには何の責任もない。

### 【施設の一日】

少女たちは起床後、食堂で朝食をとり、ミーティング場所に集合する。

義務教育年齢で学校に行く子どもたちは午前 7 時 30 分ごろまでにバスで出かける。

毎朝、バス停には真っ白な制服を着た少女たちを寮母さんが見送る。1 月 1 日から 12 月 31 日までに 6 歳になる子どもは学校に上がり、9 年間の義務教育が定められている。午前 8 時、朝のミーティングはお祈りで始まる。主宰者自身はキリスト教徒であるが、スタッフを始め仏教徒は仏教の祈り、ヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒それぞれが、自分たちの朝の祈りをささげる。朝の祈りを含めて、施設に宗教的な色彩は一切ないのが心地良い。

8 時半からおよそ 12 時半まで、作業棟でチームごとに裁縫、刺繍、織物など午前の作業時間。鐘がなるとお昼ご飯のために食堂に集まる。

NGO のスタッフはお弁当持参である。スリランカでは 365 日食事メニューはライスアンドカレー。豆と野菜、干魚が中心での質素なもの。煮炊きはかまどに集めた木の枝などで火をおこす。炊事は当番で行い、当番は朝 4 時ごろから準備をする。

学校は午前中で授業が終わり、午後 2 時ごろまでには皆施設に戻ってくる。この時間帯はキャンディ市内から郊外にかけて大変な車の混雑になる。

午後 1 時半から午前中に続けて作業時間。4 時ごろまで。

この後、炊事のための薪集め、掃除、自分の衣服の洗濯などの雑用をこなす。みんな実に

よく働く。食材は米、豆、塩、砂糖その他をスタッフがまとめて町に出て購入する。午後7時半ごろ夕食。その後は自由時間。10時ごろ就寝。少女たちの居室には入れないので、何をして過ごしているかわからない。

#### 【伝統に基づく女性差別】

スリランカでは伝統的に結婚前の女性は家庭内であたかも商品としてみなされる場合が多く、適齢の少女が家族に居ることを周囲に広める習慣が今日まで続いている。

暴力によってその純潔を奪われた少女たちは価値のない、家の恥として家庭から排除され、親戚縁者または地域社会からも絶縁されてしまうことが少なくない。

スリランカの人口構成は約7割を仏教徒が占め、そのほかヒンズー教徒、イスラム教徒、カトリック教徒などから構成されているが、女性差別に関して宗教による差異はそれほど認められない。

#### 【地域による差異】

少女に対する虐待問題の多くは農村部、特に紅茶農園いわゆる「エステート」で起こり、ヌワラエリヤ、ダンブッラ、マタレーなどの町で認められる。

農村部には「ファーム」とよばれる酪農を中心とする農園と茶畑である「エステート」があり、ファームは近代化された牧畜農場で、中で働く農民の生活レベルは比較的高く、住宅も家族ごとに独立したものが多い。外国資本が投入されたものが多く、生産性も高い。一方、紅茶農園は山岳地帯に広がる急勾配の傾斜地に作られた茶畑で、人手による茶摘が旧態依然として形で続いている。農民の収入は少なく、住宅はまことに粗末な長屋がほとんど、プライバシーは無いに等しい。

「ハイランド」と呼ばれる高地での茶葉栽培は高級品としてもてはやされているが、その実質的な権益は植民地時代からヨーロッパの国が握っており、現地農民は最低以下の生活を余儀なくされる。

歴史的には紅茶農園の栽培のためにイギリスがインドの下層階級タミル人たちを強制的に移住させて今日に至っており、今も彼らを国民として認めない人もいる。このほか、国内で多数派であるシンハラ人とセイロン島北部あるいは北東部に有史以前にインドから移住してきたタミル人との間には根深い確執があり、独立以来火種となってきた。

エステートの貧困ゆえに、海外にハウスメイドとして出稼ぎに出る主婦が多く、家庭に残された少女たちは幼い兄弟たちの世話や、料理などの家事のため、教育を受けることができず、またその家屋は簡易なトタン葺きの戸締りもまともでないものであるため、性的虐待は後を絶たない。

少女たちの被害をもたらしている相手男性は、兄弟がもっとも多く、祖父、父親、中には教師、僧侶などもあるという。被害にあった少女たちは近親者であるがゆえにそのことを話すこともできず、泣き寝入りが多い。たとえ話しても、ほとんどが不問に付されてしまい、法律にかかわらず、男性側が責任を問われることが少ない。

NGOの主宰者にたずねると、多くの問題は家庭内の不和に起因しているという。

## 【教育】

スリランカはその国名「スリランカ民主社会主義共和国」が示すとおり福祉国家を目指し、初等から大学まで学費無償である。初等中等の9年間は義務教育とされており、就学前教育もかなり普及している。

しかし、高等教育を受けるには都市部の学校に通うため、寄宿しなければならず、経済的に余裕がなければ難しい。大学は少なく大都市にしかいないため、狭き門となっている。小学校入学後も貧困家庭では労働力として使われ、義務教育終了まで就学できない子どもも少なくない。

障がいを持った子どもたちを受け入れる公的な教育機関は少なく、家にとどまる子どもが多い。独特の宗教観から、障がいを持った子どもの機能回復を望む親たちも少ない。

## 【宗教観】

人口構成の7割強を占めるシンハラ人はおおむね仏教徒である。

多数を占める仏教徒は「上座部仏教」を信仰しているが、万物輪廻の考えをもとに、「現世」については「あきらめ」、「来世」の幸福を願う傾向にある。そのため、自分のこどもたちにも、障がいを持ったり、虐待を受けたりしても全て「前世の決め事」であって、いまさらどうしようもないとあきらめてしまう。

ヒンズー教やイスラム教においても女性の教育については熱心でないことも問題である。

## 【貧困の問題】

その教育制度にもかかわらず、国民の9%が貧困層であり、そのほとんどが農村に集中している。

1日2ドル以下で生活する「広義の貧困層」はさらに多く、初期就学率が高いのにも関わらず、途中で生活のために労働力として、学業を放棄するものも後を絶たない。

## 【救済と今後の課題】

現状はNGOなど民間の努力に頼るしかないのであるが、根本的な解決となると、女性の教育が進み政治に参画することがもっとも重要な課題であると思われる。

ヨーロッパ各国から、ボランティアが訪れて個人的な支援は少なくないが、少女たちの秘密保持のため、施設の存在そのものが公にしにくいこともあり、SNS等での情報拡散については慎重にならざるを得ない。

最近、日本政府もこの施設に援助を行い建物の改修を行ったが、継続的な支援についてはまだまだである。

今回の日本支援による施設に掲げられた看板には

**THE PROJECT FOR THE RENOVATION OF THE SHELTER FACILITY FOR SURVIVORS OF GENDER BASED VIOLENCE(GVB) IN KANDY**

ー 性的暴力からの生存者のための施設の再建プロジェクト ー

とあり、適切な表現とは思えなかった。

スリランカ政府による支援もわずかであって、NGOの経営は常に厳しい状況にある。

今回、ある著名な児童文学作家の家庭を訪問し、率直な意見交換を行ったが、そこで言われたことは、このような問題について、自分たち以外に尋ねてはいけないということだった。12月の大統領選挙を前に、外国人の干渉またはアジテーションとみなされ、入国を拒否されることになりかねないということである。

2009年まで26年間続いた内戦の終結にいたる過程で多くの人権侵害があったとされる問題について、国際機関への明確な回答を避けてきている政府としてはこれ以上人権問題を拡大させたくないとの意図がある。

昨年3月の暴動の際と今年4月のテロ事件の際に政府が行った情報遮断など、少女たちの人権問題と重ねて、国民の知る権利についての制限についても考えさせられる。

### 【はじめてのスリランカ訪問】

2014年秋、同じボランティア仲間であるKさんからスリランカで活動している現地団体の話を聞く。

金銭的、物的支援だけでなく、社会復帰に役立つプログラムが必要と考えた。

以前から趣味でやっていた日本伝統の工芸「組紐」を伝えることができないかと構想を練り、道具、テキスト、材料を準備することからはじめた。

もともと組紐は中国から伝わり、主に武具の結束、飾りなどとして発達してきた。

江戸時代には庶民の服飾にもひろがり、絹を材料として、帯締め、羽織の紐などに使われ、贅沢品として、複雑な技巧と装飾性が高められた。

丸台、高台、綾竹台などの専用器具も発達し、専門化が進んだ。

実際に組紐をスリランカに伝えて、収入を得るための技術にまでするには、時間的にも経済的にも難しい。

現実的な面から考えなおす必要があり、以下のような全体像をイメージしてみた。

1. できるだけ低コストで作る。
2. 日本的なデザインを選ぶ。
3. 短時間で習得できる。

まず、道具について検討する。

従来の丸台に代わる簡易な道具として最近出回っている、「ミサンガディスク」（商品名）に目をつけた。

これは、硬質スポンジを丸く加工して、周りに切れ目を入れ、切れ目に1から32の番号を印刷もので、簡単な説明書をつけて1000円以下で市販されている。

この形態自体は特許でもなんでもなく、従来厚紙などで個人が加工していたものを材料を選んで作られたものであるため、まねすることは問題ない。

これを自作することが先決である。

さまざまな素材を検討したあげく、モザイク状に組み合わせて、床に敷くマットで厚さ10mmほどのものがちょうどよいことに気がついた。

値段も手ごろである。

ホームセンターでおよそ 30Cm 角 9 枚入りのものが 1,000 円以下で手に入る。

製品寸法から逆算して、切り抜く大きさを直径 9 Cm と決める。

一枚あたり、15 円以下で作ることができる計算となる。

これをきれいに切り抜くには「円切りカッター」が最適である。

きれいに切り抜く技術も会得して、周囲に 32 等分のスリットを切るための型紙を CAD で作る。

次は組紐の材料を探す。本来は絹糸を使うが、取り扱いはもとより、価格の面でお話にならない。木綿の糸で染色のきれいなものを探す。結局、刺繍糸と夏物用の編み糸、レース糸などが使えることがわかった。毛糸は組紐には向かない。

次にデザインとテキストの準備が必要である。

日本の伝統デザインを約 20 種類選び、サンプルとテキストを作る。

テキストは著作権の問題を避けるため、すべてオリジナルの写真を使い、手順表記も従来の図示方式ではなく、数字のみでの手順表記とした。

初回分 20 冊を手作りで作る。日本語と英語併記とし、カラーコピーで作ったがこれが一番大変な作業となった。

このほか、はさみ、カッター、塗り箸（糸をさばくのに使用）などを準備した。

2015 年 3 月 はじめてスリランカを訪問。

韓国インチョン経由でコロンボ到着。

少女たちが暮らすシェルターはコロンボから車で 3 時間ほど、セイロン島の中央部に位置する観光都市キャンディの郊外にある。

施設を運営するのはキャンディの本部を置く NGO である WDC (Women's Development Centre)。

現地では 5 人の少女たちに通訳を交えて初めての組紐教室を持った。

少女たちは思いのほかよく覚えてくれた。むしろスタッフの大人たちがなかなか覚えられないで苦勞した。

このときの授業は 3 日ほどであったが、十分にやっつけそうな感触を得て、次回の訪問を約束した。

このとき以降これまで 10 回の訪問を重ねて、少女たちの私を見る目は次第に変わっていく。

### 【2 回目以降の訪問】

2 回目からは住居の手配をお願いして、シェルターのすぐそばに空き家を貸してもらえることになった。初回はキャンディのホテルからの往復であったので、費用の面からも大助かりである。

普通少女たちはこの施設には 1 年半ほどしかとどまれない。働き先を見つけて社会に出て行く。

リタという女性がいる。彼女はすでに 20 年近くこの施設にいる特別な人であるが、彼女は足が悪く、仕事につくことが難しい。英語を少し話し、裁縫や機織などなんでもこなす。ただ、この施設でスタッフとして働くことはできるかどうかわからない。それはこの国の職業カーストの難しい側面でもある。

彼女は私の授業に初回から参加しており、今では片腕とも呼べる存在であるが、その将来はどのようなものかわからない。

WDC はキャンディ市内にショップを開いており、そこでは自立した女性の作品を中心に小物や工芸品を販売している。また、店にはカレーを中心にした喫茶がある。

ここには少女たちが作った組紐も置かれているが、まだまだ売上はわずかである。

ビノは施設では古株になった。他の少女たちはここを去っていくが、彼女はまだ職が見つからないらしい。私が滞在している間、毎日朝晩の食事を運んでくれる。

出身はヌワラエリヤ。ここから施設にやってくる少女は多い。

今回の訪問時、マダは姿が見えない。聞くと縫製工場に就職して、施設を出たらしい。この少女のことは忘れられない。

最初に私の教室に来た日、彼女はだれとも口を利かず、目もあわせようとしなかった。

彼女もヌワラエリヤの出身で、学校にもほとんど行っていない。

無表情で、初歩の組紐もできない。できないと机に突っ伏して泣き出す。

どのような場合も私はあまり甘い扱いはしない方針である。まず、早く覚えた少女にできない子の手伝いをさせる。

そのマダも次の日には最初のパターンができるようになった。でも、まだ長さがまちまちで、見本と同じように作ることはできない。

日を追って、なんとか形になってくると、気持ちも落ち着いてきて、そのうちに朝、顔を合わせると自分からにっこりするようになった。

私の教室に来る少女たちは、それぞれに悩みを抱えているが、組紐を覚えて手を動かしながら唄を歌いだすと、みんながいっしょに小声で歌いながら作業を続ける。

たまにできない子がいて、「私できない」と言ってめそめそしたりすると、私はわざと現地の言葉（シンハラ語）で「アンダンテ エパ」（泣くな！）と言う。

ほかの少女たちは「なくな！」と日本語で言って、みんなどっと笑い、泣いている少女も笑顔になる。

こんなとき、自分のやっていることが無駄ではなかったと実感できる。

毎回、ここにいる少女たちはメンバーが違うけれど、みんなは私を待っているような気がして、「また来るね！」と言ってしまう。

技術を教えることよりも、ものよしあしいいわゆる「品質」について教えることの難しさを痛感する。教育の大切さがそのことでわかる。私が作ったサンプルと彼女たちが作

ったものの違いをわからせることは本当に難しい。持ったときの感触などなど。

ここのシェルターでは自分の子どもを育てることはできない。

通常2月ほどで、赤ん坊は母親から引き離され、別の施設に引き取られる。

たいていは養子にだされたり、そのまま孤児として母親が引き取りに来るのをまつしかない。

18歳になると、少女たちは親権を持つことができるが、その子を育てることは容易ではないし、子育てで更に困難な問題は、彼女たちが経済的に自立して子どもを育てるとしても、学校にあがる時点で書類に父親の名を書かねばならず、父親のいない子どもは小学校にあがることも難しい。

これまで、一人の少女が自分で子どもを育てるといいはって、毎日教室につれてきていた例もある。後で聞くとところによると、その少女は両親と話ができて、元の家族と住むようになっただけ。これなどは稀な例である。

#### 【現地での材料調達】

組紐と関連する材料のスリランカでの調達は簡単ではない。

国内の産業が貧弱で、あらゆる製品が輸入に頼っているため、組紐の材料の例にもれず調達が難しく、あっても価格が高い。

木綿の刺繍糸や編糸はほとんどがインド産、金具類もインド産。

日本、または中国からの輸入も検討したが、スリランカでは国内産業保護の名目で、あらゆる材料・製品が輸入禁止あるいは高い関税対象となっており、現実的でない。

目下、人道支援目的ということで、関税を免除される手段を模索中である。

最初の訪問時に、機織の余り糸を組紐に使おうと計画したが、別の用途に使うということになり、諦めざるをえなくなった。

この余り糸は有望なので、再検討の余地がある。

現在はほとんど中国製の刺繍糸を日本経由で持ち込んでいる。

金具類も少しかり。インド産は価格が高く、種類も少ない。

ディスクに使うマットは以前にキャンディの市場で売れ残りの床マットを買っておいたものがまだ使える。今回、これで24枚ほど新たに作っておいたので、当面は問題なさそう。テキストに関しては、新しいパターンはインターネット経由で送ることにして、経費を節約する。

彼女たちが作る組紐は原則として、こちらが買い取ることはしない。WDCのショップで海外からの観光客に日本の伝統工芸技術を勉強してスリランカで作ったものとして売る。

そのために、デザインは日本的なものを主体とする。

#### 【日本政府の支援】

このシェルターは Pearl Stephen が私財を投じて設立した。スリランカ政府は公式にはこのような不幸な少女の存在を認めない立場であるが、国際ロータリーが以前に作業、教

育施設の寄付をおこなっており、今回日本政府が管理棟の建替えに資金を提供した。

残念なのは、あちこちに日の丸が目立ちすぎることである。

ヨーロッパ各国からはボランティアが個人的に訪れているのに比べ、ここに来る日本人はほとんどいない。

#### 【水の問題】

都市近郊では水道設備も整いつつあるが、シェルターのある地域は水事情が厳しい。水道施設はないし、近くに水源がないため、生活用水は買わなければならない。

毎日、水を積んだタンク車がやってくるが、水は本当に貴重なものである。

#### 【運転手とカースト】

私はスリランカで雇う運転手を一人に決めている。

名前はスージーワ。英語を理解し時間を守る。信頼できる運転手であるが、外で食事をするときなど、この国の文化について考えさせられる。

私と同じテーブルで食事をしないことがある。それはスリランカのカーストによるものと思われるが、外国人と同じテーブルで食事することは運転手の身分では不適切であるとの考えからだと推測する。同じテーブルであったりなかったり、いまだに違いは分からない。

#### 【まとめ】

この施設にやってくる少女たちが自立する道のりは厳しい。私ができることの限界を常に感じながら、いつの日かこの少女たちが幸せになることだけを願う。

毎回訪問時、少女たちの最初の質問は「いつまでいるの？」ではなく「この次、いつ来るの？」である。私の答えはいつも「命があれば半年後に来るよ」。

2019年11月15日

注：

**スリランカ 公式統計**

正式国名は Democratic Socialist Republic of Sri Lanka

首都 ジャワラルダナプラコッテ

公用語 シンハラ語 タミル語 認識語 英語

民族

74.9% シンハラ人

11.2% スリランカタミル人

9.2% ムーア人

4.2% インドタミル人

宗教

70.2% 仏教徒

12.6% ヒンズー教徒

9.7% イスラム教徒

7.4% キリスト教徒

0.1% その他

面積

65,610Km<sup>2</sup>

人口 21,670,000 2018 年推計

通貨

スリランカ・ルピー Rs と略す

主要産業

ゴム、紅茶、ココナツなどの農産物

観光

港湾使用料収入

など GDP はタイより低く、インドネシアなど東南アジア諸国より高い。

**長年にわたる植民地支配**

16 世紀初頭から、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地支配の下で 450 年間経過し、1948 年独立。

**スリランカのカースト**

現在スリランカでは公式にはカーストは存在しないといわれるが、実際には根強く残っている。インドと違い階級の最上位は農民であり、僧は第二位である。

その他、職業別によりかなり細かい階級意識が認められる。時として違う階級同士の結婚が無理に破談にされることもある。

祭りの中心になって、音楽や舞踊を行うのは最下層に分類される人たちであることが多い。これまで無かった職種（IT 関連など）に職を得て、カーストから抜け出る人も多くなっている。

**キャンディ**

スリランカ中央部の観光都市。仏歯寺（ダリダ・マリガワ）やペラヘラ祭りで知られる。セイロン王朝最後の場所。

**ヌワラエリヤ**

標高 2000M ほどにある茶畑を主産業とする地域。年中涼しくスリランカで最初の郵便局が作られた。

**スリランカの大学** 全部で 15 校

コロンボ大学 ペラデニヤ大学 ヴィディオダヤ大学 ケラニヤ大学 モラトワ大学

ルフナ大学 ジャヤワルデネプラ ガンゴダヴィラ大学 マラベ情報工学大学

ラジャラタ大学 ワヤンバ大学 サバラガムワ大学 ジャフナ大学 東部大学

南東大学 ウヴァウェラッサ大学 コロンボ芸術大学

**2018 年 3 月暴動**

ディガーナで起きた暴動で死者 3 名。 10 日間の非常事態宣言と情報遮断

### 2019 年 4 月テロ事件

死者 250 名超を出したテロ事件。コロンボのホテル、ネゴンボの教会などで爆弾テロ。非常事態宣言は継続。 ネット遮断は暫定的であった。

### スリランカ女性の海外出稼ぎ

66 万人以上のスリランカ女性が中東に出稼ぎに出ている。

コロンボ空港ではこういった女性たちをしばしば目にする。

主に家政婦として働いており、クウェイト、レバノン、サウジアラビア、アラブ首長国連合などでは、これらの女性たちに対する搾取、暴力が多発しており、スリランカ政府が彼女たちを守る政策が十分でないとの指摘が多い。

コロンボ空港では出稼ぎ帰りをターゲットにして免税店に冷蔵庫、洗濯機、大型テレビなどの家電品が目につく。

### スリランカと日本の関係

1951 年、サンフランシスコ講和会議の席上、当時のセイロン代表であった R.J.ジャワワルダナ氏はセイロンの賠償権を放棄し、日本の独立を指示する演説を行い各国はこれに賛同して日本は独立を認められる。 この演説の前は旧ソ連を中心とする戦勝国による日本分割案が大勢を占めていたが、氏の「憎しみは憎しみを以っては越えられない、愛を以ってのみ越えられる」という仏教經典の言葉が各国代表の心をゆさぶり、議場は総立ちで拍手がなりやまなかったと翌日の新聞が伝えた。

日本びいきであったジャワワルダナ氏は亡くなる前に遺言で、その角膜をスリランカ人と日本人に送る約束をして、実現する。

友人によると、この話は小学校で皆が教わるらしい。 実を言えば私もスリランカに行く前は知らなかったのである。

現在もスリランカ人の日本人に対する感情は非常に好意的で、一因には長年の植民地支配から逃れられたのは、日本が第二次大戦中イギリスの軍港を爆撃し、イギリス軍が撤退してセイロンの独立につながったとする考えや、アジア諸国の中で欧米に敵対した日本への共感があったとされる。

筆者注：

文中の少女たちの名前は全て仮名である。

本文は筆者が現地で見聞きしたものを根拠としているが、スリランカ全体にわたって適用されるのではなく、一切の政治的、宗教的な主張を述べたものではない。

許可なくこの文書の複写、引用を禁ずる。